研究ノート

奥三河の民俗観光関連製品の開発

長谷川恵子*1

Development of Commodity for the Market Sight-seeing of Traditional Festival in Okumikawa

Keiko HASEGAWA*1

Seto Ceramic Researchi Center*1

海外製品、他産地製品に圧迫され販路が縮小している瀬戸地域のノベルティ・飲食器製造業の新市場開拓を支援するため、今後市場としての成長が有望な奥三河地域に注目し、国の重要無形民俗文化財に指定されている民俗芸能「花祭」に焦点を当てた製品開発を行った。祭の実施状況と特徴、現地の要望、ニーズを調査し、花祭開催地域の需要に向けて瀬戸の産地特性と瀬戸焼の技術を活用した陶磁器製品を提案するとともに花祭開催地域の記念品等の商品化を行った。

1．はじめに

飲食器・ノベルティを始め、瀬戸地域の陶磁器製造業の不振は深刻であり、市場･販路の開拓が喫緊の課題となっている。本地域は小規模企業が多く、コスト的に海外や美濃などの量産に長けた産地との競合が厳しい。そのため都市圏を中心とした既存の大規模市場への新規参入が困難な現状にある。

そこで、産地活性化のため、地の利のある県内において、大手企業・商社の参入が難しく、小ロット生産に対応できる本産地の特性を活かして新規参入が可能な市場を検討し、今後発展が見込まれる奥三河地域に着目した。

奥三河北設楽郡には著名な民俗芸能として、国指定重要無形民俗文化財であり、県の地域産業資源にも認定されている「花祭」が伝承されている。本研究では、この祭に焦点を当て、市場調査により現地需要などを把握し、瀬戸焼の製造技術を活かした陶磁器製記念品の商品化を目指した。

2．調査

花祭開催地の現状とニーズ把握のため、現地調査を行った。結果の一部を**表１**に示す。花祭は、毎年 11 月から 3 月上旬にかけて東栄町を中心に北設楽郡 15 地区で開催され、運営は各地区の氏子が組織する「保存会」が担っている。祭の次第や様式は、ほぼ共通するが、地区ごとに個性や独自性が見られる。参加者は例年各地区 400 人から 900 人に及び、東栄町 11 地区で延べ 7600 人を数え、地域を越えた支援者、愛好者を持つ。

多くの地域では、祭の来場者が納める「お見舞い」(献銭)への「お返し」として記念品を提供している。「お返し」について、現地で聞き取り調査を行った結果、かつては各地区が工夫して独自の記念品を企画したが、過疎化と保存会員の高齢化に伴い独自企画が困難となり、個性の無い既製品が増える一方で、受け取る側の期待だけでなく、開催者側にも参加者に喜ばれる地域独自のものを製作したいという強い要望があることが判明した。

記念品の予算、内容等は各保存会が決定するため、各地区のニーズ、条件、個性に合う製品を提案することにより瀬戸焼の新規参入が有望な分野であると考えられる。

そこで開催地域の花祭関連記念品を製品開発の対象とした。

3．製品開発

3.1 開発方針

現地調査を行った 5 地区の内、独自製品の開発に関心の高い地区から 2 地区を選定し、各地域の祭の特徴を活かすよう配慮するとともに、保存会の意向、参加者の要望に沿って製品デザインを行うこととした。

表１　平成 22 年度花祭「お返し」品目と参加者数

花祭 調査先	「お返し」品目	参加者数（人）
小　　林	氏神お札、手ぬぐい	８００
御　　園	氏神お札	８００
月	既製品フリーカップ	９００
古　　戸	氏神お札	７００
布　　川	立湯飲み	６００

*1 瀬戸窯業技術センター　製品開発室

生産地企画・直売により、中間コストを省いて低予算に対応し、直近の祭の記念品については製品価格と開発スケジュールを考慮し、産地の既成素地を使用して、オリジナルの絵柄を提案する方針とした。

3.2 デザイン要素の検討

製品の企画・デザインにおいては次の点に留意した。

(1)特徴的なモチーフ活用による従来品との差別化

祭において主役を担う「榊鬼(さかきおに)」が、観光分野等で祭りの象徴として用いられているため、花祭といえば「鉞(まさかり)を持った鬼」というイメージが定着している。しかし、実際は、舞台の天井や結界に設けられる「切り草」と呼ばれる多彩な切り紙の祭具、幼児から高齢者まで各世代が担う数十種類に及ぶ舞、またそこで用いられる衣装、面、持ち物等の多彩さや素朴な美しさにこの祭の特徴がある。

本研究では、祭本来の豊かで素朴なイメージを表す祭具、衣装、舞等をモチーフとすることにより、鬼をモチーフとした従来品との差別化を目指した。

(2)瀬戸焼の製造技術を活かしたデザイン

開発経費と製造コストを圧縮するため、産地企業の既存の生産ラインで製造できるよう、各企業の用いる素地、製造設備、製造技術を踏まえるとともに、瀬戸焼の特徴である手工業的な加飾技術を活用し、瀬戸焼の持ち味を活かしたデザイン提案を目標とした。

3.3 製品提案と商品化

3.3.1 古戸地区記念品

古戸地区に対し花祭会場の竣工記念品として、地域の花祭のイメージを活用した磁器製立湯飲みの提案を行った。地区の意向により、古戸地区で特徴的な切り紙の祭具「ざぜち」、「神道(かみみち)」の意匠と、「湯蓋(ゆぶた)」、榊とを組み合わせて湯飲み側面を一周する下絵転写用の散らし柄（**図１**）を作成し、産地企業により花祭柄の湯飲みを製品化した。（**図２**）なお、本製品は商品化され、古戸地区の新集会所竣工記念式典の記念品として用いられた。

3.3.2 御園地区記念品

御園地区花祭に向けて「お返し」記念品の開発を実施した。上絵転写を使用した他産地製品との差別化を図るため、伝統的な瀬戸焼の手描き技術を活かして次の２シリーズの絵柄をデザインし、保存会に提案した。

A　磁器に伝統的な赤絵の唐草を用いたデザイン

花祭の「切り草」に使用される赤、黄、緑の上絵を使用し、東栄町を彩る紅葉のイメージを唐草で現し、舞に用いられる鈴や手描き文字を組み合わせた小皿。（**図３**）

B　子供の「花の舞」の絵柄を下絵付けしたデザイン

有色素地の湯飲み、茶碗、フリーカップ等の側面に、御園地区の花笠と舞衣裳を纏った花の舞の童子を童画調に描き、裏面に舞に使用する鈴を配した。（**図４**）

Bシリーズ「花の舞」柄の湯飲みが採用され、平成23年11月開催の御園地区花祭において配布された。

図１　古戸地区記念品　絵柄デザイン

図２　古戸地区記念品

図３　御園地区提案製品

図４　御園地区「花の舞」絵柄の湯飲み

４．結び

瀬戸焼の振興のため、新たな市場開拓を目指して製品開発を行った。

(1)　奥三河の民俗芸能「花祭」関連市場に着目し、東栄町の花祭開催地域の需要を調査した。

(2)　祭の特徴と瀬戸焼の特性を活かした陶磁器製品を提案・開発した。

(3)　奥三河東栄町各地区の花祭や式典の記念品として採用され、産地の振興に結びついた。

謝辞

本研究にご協力いただいた東栄町役場経済課、東栄町花祭保存会、花祭会館はじめ、関係各位に深くお礼申し上げます。